京都外国語大学ラテンアメリカ研究センター主催
第 26 回ラテンアメリカ研究講座

バルガス＝リョサを読み継ぐ　― 物語・歴史・政治・翻訳 ―

日時：2026 年 12 月 19 日（土）13：30～17：30（予定）
会場：京都外国語大学

＜講座案内＞

マリオ・バルガス＝リョサ（1936―2025）は、20 世紀後半から 21 世紀にかけて世界文学を牽引したペルー出身の作家であり、2010 年にノーベル文学賞を受賞した。『都会と犬ども』『緑の家』『ラ・カテドラルでの対話』『世界終末戦争』などの作品は、複数の時間・空間・視点を交錯させる革新的な構成によって、現代小説の可能性を大きく切り拓いた。
その文学が問い続けたのは、権力と暴力、個人の自由と責任、歴史と記憶、信仰と革命、社会的分断といった問題である。これらはラテンアメリカの歴史的現実に深く根ざしながら、今日の世界にも通じる普遍的な問いを含んでいる。

また、バルガス＝リョサは政治や社会問題に積極的に関与し、知識人として長年にわたり発言を続けた。その思想的立場の変化や政治参加は、文学と政治、芸術と社会の緊張関係を考える上でも重要である。さらに、複雑な語りと多様な文化的背景をもつ作品が日本語へどのように移され、読まれてきたのかという翻訳と受容の問題も、その文学的遺産を検討する上で欠かせない。

本講座では、バルガス＝リョサ研究に長年携わってきた研究者と、その主要作品を日本語に紹介してきた翻訳者を迎え、初期から晩年までの作品を、物語技法、歴史認識、政治思想、音楽、翻訳と受容という多様な観点から読み直す。没後のいま、その文学をどのように評価し、次の世代へ読み継いでいくことができるのかを考えたい。

＜プログラム＞

開会の辞（13：30）

発表（13：35～16：35）　※各発表 20 分、質疑応答 10 分

・立林 良一（元同志社大学 准教授）
　「マリオ・バルガス=リョサの 1990 年大統領選出馬の背景」
・ダニエル・アリエタ（京都外国語大学 准教授）
　「『私の沈黙を捧げます』における「天球の音楽」――ペルー・ワルツが紡ぐ社会調和の理想」
・松本 健二（大阪大学 教授）
　「バルガス＝リョサ『緑の家』の革新性」
・旦 敬介（明治大学 名誉教授）
　「バルガス＝リョサの語りの手法と翻訳」
・柳原 孝敦（東京大学 教授）
　「自らを裏切る反フェミニスト――バルガス=リョサ作品における性と名誉」

質疑応答を含むパネルディスカッション（16：40～17：25）

総合司会　フェリッペ・モッタ（京都外国語大学 講師）

閉会の辞（17：25）

＜発表要旨＞

「マリオ・バルガス=リョサの 1990 年大統領選出馬の背景」

立林 良一（元同志社大学 准教授）

要旨：バルガス=リョサは文学活動のかたわらジャーナリスティックな発言も生涯にわたって精力的に行ってきた。しかし、あくまでも作家であることが天職であると公言していただけに、1990 年の大統領選挙への出馬表明は、多くの読者を驚かせる出来事であった。彼を直接政治の世界に踏み入れる決心をさせた当時のペルーの社会状況と、アルベルト・フジモリとの決戦投票に敗北するまでの流れを、『水を得た魚』を中心に解説する。

「『私の沈黙を捧げます』における「天球の音楽」――ペルー・ワルツが紡ぐ社会調和の理想」

ダニエル・アリエタ（京都外国語大学 准教授）

要旨：本発表は、バルガス＝リョサの『私の沈黙を捧げます』を「天球の音楽」の思想から読み解く。作中におけるペルー・ワルツは単なる大衆音楽にとどまらず、政治的・人種的暴力に抗し、世界の本質的調和を知覚させる表象とされる。狂気と隣り合わせの音楽論とメタ語りを通じ、作家が描いた国民的連帯の理想像を明かす。

「バルガス＝リョサ『緑の家』の革新性」

松本 健二（大阪大学 教授）

要旨：いわゆる初期三部作を形成する『緑の家』はペルーのコスタとセルバをつないで複数時間の物語を錯綜させるその大胆な物語構成に加え、当時としては非常にユニークなスペイン語の文体でも知られる。前後して刊行された『都会と犬ども』『ラ・カテドラルでの対話』における文体上の技巧との比較も交え、この傑作小説の魅力を再考する。

「バルガス＝リョサの語りの手法と翻訳」

旦 敬介（明治大学 名誉教授）

要旨：とくに『緑の家』と『ラ・カテドラルでの対話』ではバルガス＝リョサが独自に発展させた自由間接話法に類する手法が多用され、重要な役割を果たしている。この方法を観察し、その効果を評価する。そのうえで、間接話法が文法的に確立されていない日本語において、この手法がどのように扱われ翻訳されてきたかを論じたい。

「自らを裏切る反フェミニスト――バルガス=リョサ作品における性と名誉」

柳原 孝敦（東京大学 教授）

要旨：晩年、「フェミニズムは文学の敵だ」と発言し、若い女性作家フェルナンダ・メルチョールから「フェミニズムも文学もバルガス=リョサを必要としない」とやり返されてしまったバルガス=リョサだが、彼の作品は、果たして、それほど反フェミニズム的なものだろうか？バルガス=リョサ作品に現れるジェンダーや性の問題を検討し直してみたい。